

犯罪、非行の再発防止

松原市立松原第六中学校 1年 伊東 晃誠（いとう こうせい）

ぼくは、犯罪や非行を起こしてしまった人がどうして犯罪や非行を再発してしまうのか、どのように立ち直っているのかについて調べてみた。

すると、毎年約6400人の受刑者が、帰るべき場所がないまま刑務所を出所し、そのうち約2133人（3人に1人）は2年以内に刑務所に戻っていることがわかった。

次に、いったいどのような理由で非行や犯罪を繰り返してしまうのかについて調べた。

「非行や犯罪をする仲間との関係が続いた」（42.9%）・「学業や仕事を続けられない・仕事が見つからない」（31.3%）・「まじめな友だちが少ない・いない」（29.8%）・「処分を軽く考えていた・あきらめていた」（25.0%）などが再非行の理由として選択されていた。

そして今、日本では刑務所を出所した後、帰る場所もなく仕事にも就けないことが多く、犯罪者の居場所づくりが課題となってきていることがわかった。国では、約17年前から帰るべき場所がない者の一時的な居場所を確保するため、自立更生促進センターにおける確実な受け入れの推進、更生保護施設の受け入れ機能の強化、施設設備の促進、自立準備ホーム等の、多様な一時的帰住先の確保の取り組みを進めているそうだ。そして、保護施設で学習をしてから出所していき、次の場所で受け入れられて社会に復帰することに繋がっている。

再発防止のためには、次の場所で自分を理解されること、支えられることが大切だということだ。そのうえで、非行をした者の立ち直りを社会で支えていく民間協力者が活動しやすい環境づくりを進めるとともに、「犯罪や非行をした者を排除・孤立させるのではなく、再び受け入れることが自然にできる社会」が今求められていることがわかった。

人々に犯罪や非行をした者を社会で受け入れる必要性について知ってもらい、一人ひとりの立場に応じて、再発防止に向けた活動に参加・協力することが犯罪や非行の再発防止に大きくつながっていくのだと思う。

再犯防止は簡単にできることではないが、絶対にあきらめてはいけないことだと思う。犯罪や非行をした者を孤立させるのではなく、「犯罪に戻らない、戻さない」という強い気持ちで、再び受け入れて社会に復活させることが自然にできる社会をめざし、みんなで協力していく必要がある。

このことから、罪を犯した人を罰して放っておくのではなく、罪を償った後の生き方を社会みんなで支え、立ち直っていけるように、自分にできることは精いっぱい努力しようと思った。また、罪を犯してしまった人が、犯罪の残酷さや辛さなど、自分で感じたことを世の中に発信して広めていけたらいいなと感じた。

社会を明るくするために、私ができる事

松原市立松原第四中学校 1年 石通 真心（いしず まこ）

「社会を明るくする運動」の作文を書こうと思った時、私は少し困りました。なぜなら今まで、「犯罪・非行」などについて考えるきっかけがあまりなかったからです。そこで私は、犯罪や非行の立ち直り、そしてその原因などを調べてみました。

一つ目は、子供でも非行に走ってしまう事があるということです。その子供たちは「深いさびしさ」を抱えているそうです。犯罪行為をおこしたり、おこす可能性のある少年を、非行少年と言い、非行少年の人数は減少しているようですが、人口一千人あたりの検挙人数は成人よりも、非行少年の方が多いたことが分かっています。私は自分と同じ年代の子たちが「さびしさ」を抱えて、犯罪を犯してしまっている知り、一人ぼっちなんだなと思いました。家でも、話し相手になってもらえなかったり、頼れる人がいなくて「さびしい」と感じるんじゃないかなと思います。

二つ目は非行に走ってしまう原因についてです。詳しくみると、「家庭環境、家庭のしつけ」が最も多く、次いで「社会環境」「交友関係」などと書かれていました。

ここまで調べてみて、私は犯罪を犯してしまう人がこんなに大変な環境で抱えこんでいるんだと知りました。でも、ここまで知った上で「私にできることは何なのか」と分からなくなりました。そこで私は、学校で見た法務省の動画や、それに関連する動画も調べてみました。そして気付いたことがありました。どの動画も、犯罪や非行から立ち直った人に、保護司の方であったり、家族、職場の人などが、一緒に悲しんだり、喜んだりして「寄り添ってあげている」ということです。「犯罪・非行」を身近なことで言うと、暴言、暴力、いじめだと思います。それをしてしまっている人に話をきいてあげると、いつかなくなるんじゃないかと思いました。

社会を明るくする運動について

松原市立松原第二中学校 1年 岸 愛珠 (きし まなみ)

私は、社会を明るくする運動の中でも、小さい頃からできること、小さい頃から気をつけておいた方が良くないかなと思うことについて考えました。現在、日本では、日々生活していく中で、小さい子どもから大人まで、暴言やいきすぎた言葉などが増えてきて、それに慣れてきつつもあるんじゃないかと考えています。ニュースを見ている、「最初は口げんかから始まって、そこから頭に血がのぼって……」という犯罪のケースが、案外多いことが分かりました。だから私は、軽く言ったつもりが発言でも、人を死に追いつめる可能性があるということを知り、小さい頃から学び小さい頃から気を付ける必要があると考えています。

最近、学校でも、少しいきすぎた冗談や、言葉が増えてきているように感じます。さらに、それが当たり前になっていると思います。当たり前のようになっている理由の中でも、「インターネットの発達」が大きいと考えています。今では、小学生の頃からスマートフォンを持つ人が多くいます。SNSなどは、色んな人が色んな発言をしている場所なので、もちろん暴言などの発言は多くあります。それを見て、色々な言葉を覚えて、軽く発言してしまうようになったのだと、私は考えています。ゲームでも同じことで、特に戦闘系のゲームだと、口が悪くなってしまうのかなと思います。そこから、本当に犯罪に発展してしまう可能性もあるし、自分の手でやらなくても、自分が発した言葉で、相手の心に傷をつけてしまいます。暴言だけでなく、暴力もそうです。学生や大人、誰でもそうだと思うのですが、進んで暴力をふるいたい、という人は少ないと思っています。ですが、無意識、遊びだという考えの上での軽い暴力などはよくあります。相手も承知の上だったりとか、相手も遊びだと認識している場合だと良いのですが、相手が不本意だったり、「やめて」と拒否している場合は、暴言と同じく、相手の心も、体も、傷つけていることになり、自分のことばかり考えていると、相手の気持ちも当然分かりません。なので、相手の性格を把握し、相手の立場に立って考えてから発言や行動をしていかないとはいけません。ですが、相手の気持ちを考えたりするのが得意な人もいれば、苦手な人もいます。だから、苦手な人は、自分の感覚を元からずらしすぎないようにすることを大切にしたいと思っています。感覚を元からずらしすぎない、というのは、暴言や暴力に慣れないということで、ちゃんと「これ言われたら、いやだな」や「こういうことされるのいやなんだよな」という感覚をそのまま無くさず持つということです。その感覚を無くさずにいれば、「自分がこれされたらいやだから、相手にするのもやめておこう」と思えるんじゃないかと考えたからです。

暴力のことについてもふれましたが、私が特に気を付けてほしいのは、「言葉」の力です。「暴力>暴言」と考えている人が大半でしょうし、自分も元々そっち側の考えだったんですが、暴言と暴力のことについて深く考えたときに、暴力は体に、傷がつくけど、暴言は、心だけに、傷がつくんです。それって何かすごくいやだなと思いました。心についた傷は、簡単になくならないものだし、一生残ることもあります。だから、そういう力を持つ言葉を、軽く考えて発言したらだめだなと思ったし、みんなにも軽く発言してほしくないなと思いました。小さい子ども、学生も、大人も、もう一度今までの行動、言動を思い返して、言っている言葉だったのか、言っている言葉だったのかを考え、これからは、人が喜ぶような、笑顔になるような、そんな言葉を言って、みんなにも広げてほしいなと思いました。悪口を言い合って、バカにしあう関係、もしくは人の悪口でつながる関係ではなく、良い言葉でつながりあえるような人間関係を作っていきたいし、世界中の人々が、そういう関係でつながってほしいと思いました。そうしたら、地域、国だけでなく、世界全体が良くなるのかなと思います。世界中の人々が、言葉の重みについて考え、世界中の人々に、「言葉」を大切にしたいなと思いました。

支えてくれる人

松原市立松原中学校 2年 山下 千音
(やました ゆきね)

あなたには支えてくれる人はいますか。

私は友だちにたくさん支えられています。以前、テレビで非行をおこなって少年院に入った人について取り上げられているニュースを見ました。その人は中高生の時に非行をしていましたが、大人になった今は更生しお医者さんになっていました。クリニックの院長として働き、患者さんに頼られる人気のあるお医者さんのようです。どのようにして非行をおこなっていた人が立ち直り、患者さんに寄り添うことができるようになったのかが気になり調べてみました。調べる中で私は保護司という人がいることを知りました。保護司は犯罪を犯したり非行をおこなった人が刑務所や少年院から社会復帰するときにスムーズに社会生活ができるように、住居や就業先などの帰住環境の調整や相談などをおこなってくれるボランティアです。その保護司の助けによって支えられ更生できる人もいることを知りました。前述の更生し医者になった人も保護司に支えられた一人です。困難な道のりの中でも保護司が立ち直りを信じてくれ、医者になる夢も人一倍応援してくれました。保護司の「俺の死亡診断書を書けるようになれ」と言われたことを胸に頑張り、最後にはその約束を果たすことができました。私はこのニュースを見ることで、身近に支え信じてくれる人がいればそれが更生する力になるのだと感ずることができました。

私が友だちと一緒にいるときにイラついたけどやっぱり友だちは大切だなと思った時の話をします。私の家で遊んでいる時、友だちがお腹がすいたのでお菓子が欲しいというのでお菓子をあげました。けれどそのお菓子があまりおいしくなかったようで処分することにしました。私が「ごみ箱がここにあるので捨てておいてね。」と言って他のお菓子を探して戻ると、もう一人の友だちと遊ぶうちにお菓子が粉々になって床に落ちてしまっていました。すぐに謝ってくれればよかったのですが、何も言わずに友だちとゲームをし始めて結局私がお菓子の後片付けをしました。そのことでイラついてしまって友だちとけんかになりました。けれどももう一人の友だちがけんかを止めてくれて仲直りすることができました。私には助けてくれ、時には支えてくれる友だちがいるから激しいけんかにならずにすみませんでした。きっと逆のパターンでもまた違う友だちが止めてくれると思います。今回はただのけんかだったけれどそれが非行などの問題でもきっと同じように支え合えると信じています。

私は社会を明るくする運動の作文を書いて、普段から支えてくれている友だちや家族、先生がどれほど大切かわかりました。社会のいろいろな人たちも支え合えたらいいと思うけど、皆が皆そういうわけにもいかないと思うので、まずは自分の中で道德の授業を一生懸命受けたり、思いやりの心を身につけることで自分の身近な人たちの力になれるようにしていきたいです。そしてその支え合いの輪が少しずつ大きくなって少しでも社会が明るくなればいいと思います。

知る

松原市立松原第七中学校 2年 齋藤 音歩（さいとう おとあ）

私は、人の考え方や価値観を知ることが社会を明るくすると思います。

例えばクラスメイトが三十人いたとしてもその中で仲の良い人、苦手な人、あまり話したことのない人などと分けられると思います。そこで仲の良い人とどうして仲を深められたのか、ということを考えてとき、様々な理由が出てきました。たくさん話をしたから、一緒に遊んだから、部活が同じだから、気が合うから。他にもたくさんありますが、このように仲を深められている理由を挙げたとき、結果的にどれも相手を知るきっかけになる理由だと私は思います。相手を知ることは、とてもこわくおもしろいことです。お互いの考え方がおもしろいと思うこともあるし、誰もが考え方や価値観を知られることは多少なりともこわいと感じることがあると思います。だからこそ人を知るとはとても大切で、社会を明るくできることだと思います。逆に、苦手な人はどうして苦手なのかを考えてみました。否定的な言葉を使うから、人のことを悪くいうから、色々理由が挙げられますが、仲を深められる理由と対照的に苦手な理由は少ないと思います。それは相手のことをよく知らないからだだと思います。

「あ、この人のここが苦手だ。きらいだ。」

と感じた時点で、出来るだけ関わりを減らしてしまうのではないかと思います。そうすると、その人の性格やうわさを決めつけて、一方的に苦手意識をもってしまうと思うし、一度いやなところが見えてしまうと、いやなところにしか意識がいなくなってしまうと思います。そこから、またふつうの友達にもどることは、きっとすごく難しいことです。けれど相手を好きにならなくても、少しでも苦手な人を知ってみようと思う気持ちは大切だと思います。なかなか行動に起こせなくても、「苦手」や「きらい」「無理」で終わらせず、少しでも良い部分を知ろうと努力できれば、ほんの少し苦手だという気持ちがうすれて、前向きになっていけるのではないかと思います。もちろん知ったところで、やっぱり苦手だと感じることもあると思います。けれど相手を知ろうとする努力をしてみたという事実が大事だし、更に知って、もっと苦手になることは少ないと私は思います。みんなと仲が良いなんて人はほとんどいないと思います。人と関わらないといけないのだから、苦手な人、きらいな人がいることは当たり前のことです。無意識のうちに仲の良い人で固まって行動して、苦手な人と関わりを減らすようにしていると思います。だから、たくさん人の意見や考え方を知ることが大切だと思います。そこで、知るだけでなく共感したり、自分にない考えや意見を否定せず、「なるほど…」などと、相手も、もっと仲良くなりたいと思う言葉遊びをそれぞれが心がければ、より良いのではないかなと思います。

正直に言うと、私は、苦手な人でも、少し他のことも知ってみようとすぐに行動できるタイプではありません。けれど苦手な人がどうして苦手なのか理由を挙げるとき、なかなかどうして苦手かが書けませんでした。だから本当にあまりその人のことを知れていないんだ。ということを実感しました。だから、私も私なりのペースで知ることを頑張りたいと思います。

人を知るとは、おもしろく楽しいです。知られることは少しこわいかもしれませんが。仲の良い人をもっと知るのも、苦手な人を少し頑張って知ってみることも、みんなが勇気を出して、お互いを思いやって、お互いを知ると、ほんの少しでも社会が明るくなると思いませんか。社会を明るくするために頑張ってみませんか。

一歩が人のために

松原市立松原第三中学校 2年 大村 明莉（おおむら あかり）

「社会を明るくする運動」についての作文を書くことになって、「正直私に関係ないし、書いてどうするんだろう」と思いました。私がこう思っていたように、社会が明るくなるには、みんなが物事を自分事に受け取ったり人に関心を持ったり、人との関りで一歩を踏み出さなければならぬと考えました。そう考えた理由は三つあります。

一つ目は、再犯についてです。一度犯罪を犯した人が、またくり返してしまうのは、社会からの偏見や出所、出院後の孤立が原因となっていることが多いそうです。これを知って、私は「悪い人だから何回もしてしまう、どうせくせになっているだけだ」と思いました。でも、実際には更生しようとして心に決めても、偏見による孤立でうまく社会に適合できない人がたくさんいるのだと知りました。それを知った上で考えてみると、私の「悪い人だから」と思っていたことも偏見に含まれてしまうし、そういう人がいるからいつまでも社会を変えることができないのだと思いました。そこで、犯罪を犯した人と関わるのは難しくても身近に悩んでいたりと孤立している人がいたら自分から関わることはできるのではないかと考えました。孤立が原因で犯罪が起きてしまうのなら、孤立させなければいい、孤立をなくせばいいと思います。だから、その人の助けになるために、社会を変える一歩になるためにここで踏み出すべきだと思います。

二つ目は、実際に経験したことからの考えです。私が母ともめてしまい、家にいても空気が重たく辛くてすごく悩んだことがありました。毎日学校が終わっても、家に帰りたくない気持ちが強くなって、暗い気持ちで下校していました。そんなとき、私の小学校からの友だちが声をかけてきてくれたのです。友だちの「最近どうした？なんかあった？」という声を聞いただけで、なんだかすごくほっとしました。この経験で、友達が声をかけてくれたことでけんかも解決できました。だから、犯罪に置きかえて考えると、暗い顔をしている人に声をかけることで犯罪を防ぐことができるのではないかと思いました。

三つ目は、割れ窓理論についてです。割れ窓理論とは、割られた窓をすぐに修理すれば、他の窓が割られる確率は低くなるという説を唱えた理論のことです。私はこれをネットで知り、学校に置きかえて考えてみました。窓が割られたままになっていると「もしかして割ってもいいのではないか」と思ってしまいます。割ることへの罪悪感がうすれてしまうのです。そうすると、他の窓も割られていってしまいます。そして、最終的に「悪いことをしてもいい場所」という認識になり、なぐり合いやいじめが起こってしまいます。だから、軽いことだからと放置するのではなく、気づいたときにすぐ解決していかないと、犯罪はどんどん増えていくのだと思います。一つ目や二つ目とも重なりますが、私たちにできることは人を気にかけることや、思いやりだと思います。

この三つの考えのように、社会が明るくなるためには、人に関心を持つ、人との関わりで一歩を踏み出すことが必要だと思います。私は、社会を明るくする運動の作文を書くことを通して、改めて孤立することの怖さと、人とのつながりをつくることの大切さを知ることができました。少年院を出た人に私が直接できることは、正直今のところ思いつきません。でも、身近な誰かが絶望してしまう前に悩みを聞いてあげることなら私にもできると思います。次に悩んでいる誰かを見かけた時には、私が小学校からの友だちに聞いてもらったように、私も悩みを聞いてあげたいと思います。これから、明るい社会をみんなで作ってあげていくために、自分たちがまっさきに行動を起こすことができるような人になっていきたいです。

社会をよりよくする為に

松原市立松原第五中学校 2年 仲井 捺梢 (なかい ななこ)

私はもっとよい社会を作っていくときに、人への感謝がとても大事だと思いました。感謝を伝えるのは当たり前だと思っている人も多いと思います。ですが、私はこの感謝を伝えるという行動は難しいことだと思います。私がなぜ感謝を伝えるのが難しいと思うのか、感謝を伝えることがなぜそんなに大切なのかをここに述べたいと思います。

まず、感謝を伝える中で難しいと思ったことがあります。それはいつも当たり前のように家事をしてくれているお父さん、お母さんに、やってもらった量の感謝を伝えることです。洗い物などを自分ですることによって大変さは分かりますが、中々感謝は伝えられていません。だから、私は感謝を伝えることは簡単だと思っても難しいことだと思いました。

次に感謝を伝える重要さです。私が思う感謝を伝える重要さは二つあります。

一つ目は、言ったほうも言われたほうも気持ちが良いということです。「ありがとう」と感謝を伝えてもらって嫌な気持ちになる人はいないと思います。感謝を伝えてもらうことで、「またしよう」など、そういった気持ちになれると思います。私もお手伝いをした後に「ありがとう」と伝えてくれたら、人の役に立てたと実感できてとても嬉しくなった経験があります。また、言ったほうもすっきりした気持ちになれると思います。言わないより言ったほうが絶対にいい関係、いい場所、いい雰囲気を作っていけるとと思います。だから、ちょっとしたことでも感謝を伝えることはとても大切だと思います。

二つ目は、犯罪や非行にも良い影響があるということです。なぜなら、犯罪や非行は感謝を伝えられる行動ではないからです。感謝を人に伝えることで何をされたら嬉しいかなど感じることができます。そういった行動を目の前で見て、自分で口に出して感謝を伝えるので、何かしら感じ取ることができると思います。何をされたら嬉しいか、感謝を伝えてもらえるか、行動を考えてすることは、犯罪や非行にも何かいい影響があると思います。もし犯罪や非行をしてしまっても、感謝を伝えられる行動をとれば、人からの信頼も少しずつ戻ってくると思います。だから、私は犯罪、非行にもいい影響はあると思います。

このように、人に感謝を伝える、伝えられることはとても大切です。感謝を伝えることで相手も自分も気持ちよくなります。それに感謝を伝えてもらう行動をとると、自然に相手の気持ちを考えて行動できるようになると思います。そういった行動は相手も嬉しくなるので、この社会でも増やしていきたいです。それを実行するためにまず、私たちの身近な存在である家族、友だちとそのような関係を作ることが大切だと思います。私は感謝の言葉一つでここまでいいメリットがあることを経験し、感じました。何気ない会話でも優しさがあふれるようになりたいと思いました。その場面になる為にも人への感謝は忘れてはいけなかったと思います。